

サレビア

特集

対談 病院長 × 本荘中学校 校長

名誉院長あいさつ／冬場の感染症について／紹介重点医療機関として公表されました／
スタッフインタビュー／病院情報システムを更新いたしました

Vol.

35



(防災研修の様子)



岐阜市民病院 病院長

山田 誠

岐阜大学医学部卒、専門は消化器外科。これまで岐阜市民病院で外科局長、副院長を務め、本年度より病院長に就任。

岐阜市民病院の近くには岐阜市立本荘中学校があります。本荘中学校とはこれまで様々な取り組みを行ってきました。今回、病院を飛び出して、本荘中学校にお邪魔し、校長先生とお話させていただきました。私は本年4月から病院長に就任しましたが、上松校長先生も本年4月から本荘中学校に赴任されました。

11月15日(水)に本荘中学校で開催された防災研修には自治会や行政の他、市民病院からもDMAT※1が参加しました。



山田:市民病院が参加させていただくのは今年で2年目ですが、このような関わりは中学校からみていかがでしょうか。

上松:防災研修は2年生で行うこととしています。私は昨年度まで岐阜中央中学校

岐阜市立本荘中学校 校長

上松 英隆

岐阜大学教育学部卒、専門は社会科。岐阜県内各地の中学校で教鞭をとり、岐阜中央中学校で4年間校長を務めた後、本年度から本荘中学校に赴任。

におり、そこでも研修は行っていたのですがイメージがまったく違いました。本荘では病院や自治会も一緒になって地域ぐるみで行っています。病院と中学校は数百mしか離れていないので、病院の近くにある中学校という存在意義を考えながら取り組んでいきたいと思っています。

研修の中では、傷病者に対応する訓練を行い、中学生が傷病者役となり治療を受けたり、傷病者役の方を担架で運んだりしました。

山田:災害時には人手が足りなくなることが予想されますので、**中学生の皆さんにも助ける側の経験をしていただいたことに意義があると思います。**また、多数の傷病者に対応するため、市民病院で治療を終えたけれども帰宅困難という方はそのまま病院に待機していただくのではなく、中学校に開設される避難所へ移動していただくことで新たな傷病者の**受け入れが可能**になります。市民病院は市街地にあり、非常に手狭なので、地域と連携できていることは我々にとって非常に心強いです。



上松:中学生も助けられる側から助ける側になるという経験ができました。今回DMATの先生方が生徒の目の前でトリアージ※2を行っていただきましたが、そういったことは中学校だけではできなかったですし、実際に災害が起きたらこうなるのかということも中学校2年生の段階で知っておくことができたことは、非常に意味があることだと考えています。毎年継続していくことで、本荘中学校の生徒は全員経験していくことができますし、生徒たちが大人になってこの地域にいても他地域にいてもきっと役に立つと思っています。市民病院が近くにあるということで、子どもたちにとって貴重な経験になっています。



トリアージタゲ

担架を運ぶ学生たち



職場体験の様子

病院内での取り組みとして、10月には職場体験で生徒を受け入れました。生徒の皆さんには看護師、薬剤師、リハビリテーション技師、臨床工学技士、検査技師の仕事を見学してもらいました。

上松:2年生の授業で職場体験があり、今回は43事業所に受け入れていただきました。その中の一つとして市民病院に受け入れていただいたわけですが、診療でお忙しいところ快く受け入れていただきありがとうございました。生徒たちは、今後自分達がどのような大人になり、どのような仕事に就くのかを考えていく時期であり、とても勉強になりました。

山田:我々にとっても**将来の地域医療を担う医療職を育成することは大きな命題**ですから、子どもたちに医療に興味を持ってもらいたいと思っています。医療というと医師や看護師という職種がまず思い浮かぶと思いますが、実際には様々な職種が一丸となって働いています。病院に見学に来ていただくことで、**多くの職種がチームとなって患者さんのために働いていることを感じてもらえたのではないかと**と思っています。

上松:病院内での取り組みでいうと、市民病院の中には院内学級があります。通常の授業だけでなく季節のイベントも行われていて、先日見学に行ったのですが、イベントでは小児

科の先生や看護師さんらも出し物をしてくださりとても温かい雰囲気です。素敵だなと感じました。私自身も趣味のスキーで転倒し骨折して入院したことがあるのですが、その時の看護師さんの献身的な看護にはとても感銘を受けました。

本荘校区を地理的な目線でお話いただきました。

上松:本荘中学校の校区は意外と広範囲で、シティ・タワー43や最近できた柳ヶ瀬グラッスル35も本荘校区です。中学校は校区の北西に位置しています。市街地ということで土地の確保の面からこの場所になったのだろうと思っています。



子どもたちにとって貴重な経験になっている

山田:病院も同様に土地の問題があり、非常に手狭な状態です。地域医療を守るためには、地域単位で対応を考えていかなければならないと考えておりますので、今後とも市民病院との連携をよろしくお願いいたします。

上松:中学校の近くに大病院があるというこの校区の特殊性がありますので、そこは協力していかなければいけないと思っています。こちらこそ中学校との連携を引き続きお願いします。また、市民病院の近くを生徒が登下校しておりますので、皆さん温かく見守っていただければと思います。

※1 DMAT:災害派遣医療チームのこと。Disaster Medical Assistance Teamの頭文字をとって略して「DMAT(ディーマット)」と呼ばれています。「災害急性期に活動できる機動性を持ったトレーニングを受けた医療チーム」と定義されています。

※2 トリアージ:多数の傷病者が同時に発生した場合、傷病者の治療優先順位を決定することです。決められた判定基準に基づき緑、黄、赤、黒などに順位付けします。

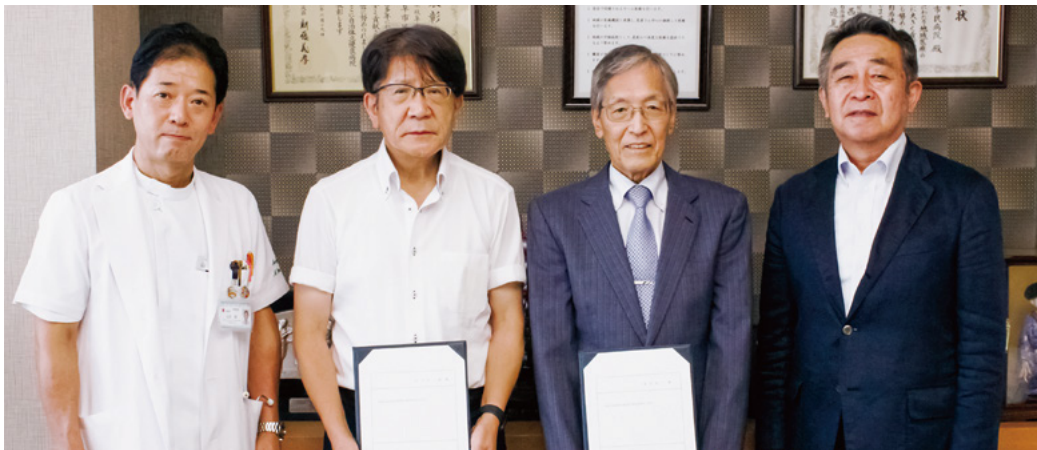


防災講和を聞く学生たち



岐阜市民病院 名誉院長 富田 栄一

この度名誉院長にいただいた富田栄一です。私は、平成元年に、岐阜大学から消化器内科部長として当院に赴任してまいりました。以後、消化器内科の臨床を中心に働かせていただき、平成17年には病院長を、令和元年には病院事業管理者を拝命いたしました。消化器内科部長としては、消化器病センターの設立と共にC型・B型肝炎などの肝疾患、胆膵疾患、胃腸疾患などの診断と治療を行いながら、病院長としては、医療安全・感染対策などと共に、西診療棟の建設や、新しい医療制度への対応などを行ってまいりました。この間に、地域医師会の先生方との連携を大切にして、地域連携パスの作成や運用に関わらせていただき、一方地域医療支援病院として地域市民の皆様とのつながりに重点を置いた病院運営を行ってまいりました。皆様から、愛される、頼りにされる、“最後の砦”としての病院を目指してまいりましたが、今後ともそのような役割を果たしていく病院であり続けていただきたいと思います。



岐阜市民病院 名誉院長 太田 宗一郎

このたび名誉院長の称号を頂き、非常に名誉なことであり、ありがとうございます。1997年に当院に赴任し、多くの諸先輩、同僚や仲間を支えられながらの25年でした。この間には多くの思い出がありますが、とくに病院長就任しての3年は、まさにコロナで始まり、コロナが2類から5類にかわり、コロナで終わりつつある3年でした。このようなコロナの危機的な状況の時には、医師、看護師、多職種のスタッフ全員が力を合わせて、一生懸命コロナと闘ってくれたことに大変感謝しています。このコロナ禍を経験して、患者さんにとっても親切な病院、また職員にとっても働きやすい病院、このような病院にしていくには、詰まるところ人だどつくづく感じました。コロナ禍が終わっても、医療を取り巻く環境が財政的にも制度的にも非常に厳しい時代が続くと思いますが、職員一人一人が価値観を共有して、一枚岩になって、難関を乗り越えてほしいと思います。私も市民病院退職後も、健康である限りは、年齢・能力相応に医療・介護施設においてささやかながら社会に貢献していきたいと思っております。最後に皆様方のご健勝とご活躍並びに岐阜市民病院の益々のご発展を心よりお祈りしております



冬場の感染症について

<感染症の予防について>

感染伝播を遮断しよう

手洗い、マスク着用、清掃（除菌）、室内環境の調整、ワクチン接種、免疫力を高めておく（食事・睡眠）

感染経路

接触感染

空気感染

飛沫感染

冬場の流行感染症予防

マスクの着用
 ● 人混みに出る時や咳が出る時など

室内の湿度・温度
 ● 湿度 50~70%程度を保つ
 ● 温度 10~25℃程度を保つ

生活習慣
 ● 適度な運動
 ● 食事はバランスよく
 ● 睡眠はしっかりと

感染対策の基本は「手洗い」です。知らない間に病原体を拡げてしまわないよう**一人一人が感染対策を行うこと**で感染症の拡がりは最小限に抑えることは可能です。

医療機関や施設を訪問する際は、免疫力が低下している方が多くみえますので、感染防止のためマスクの着用を忘れずに！！

今季は新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し初の冬を迎えます。
 冬場に感染症が流行しやすい理由の1つには、**気温と湿度**が考えられます。低温・低湿度を好むウイルスや細菌、微生物などにとって、寒くて空気が乾燥する冬は最適な環境で高温・多湿の夏よりも長く生存できるようになるため感染力が強くなります。さらに、空気が乾燥していると、咳やくしゃみの飛沫が小さくなり、飛沫に含まれたウイルスが遠くまで飛びやすくなります。そのため、一度の咳やくしゃみによる感染範囲が拡大し、感染スピードも上がります。また、冬は寒いため人の免疫力が低下し、外気の乾燥に加えて、夏場ほど積極的に水分をとらなくなるため、体内の水分量も少なくなりがちです。結果、体内外の乾燥によって、本来は粘液でウイルスの侵入を防いでいる鼻や喉の粘膜が傷みやすくなり、ウイルス感染を起こしやすくなります。新型コロナウイルス感染症にも注意しなければなりません。その他、冬場に注意が必要な感染症には、「インフルエンザ」「感染性胃腸炎」「RSウイルス」があります。(感染対策室)



紹介重点医療機関として公表されました

令和5年8月に当院は「紹介重点医療機関」として公表されました※。

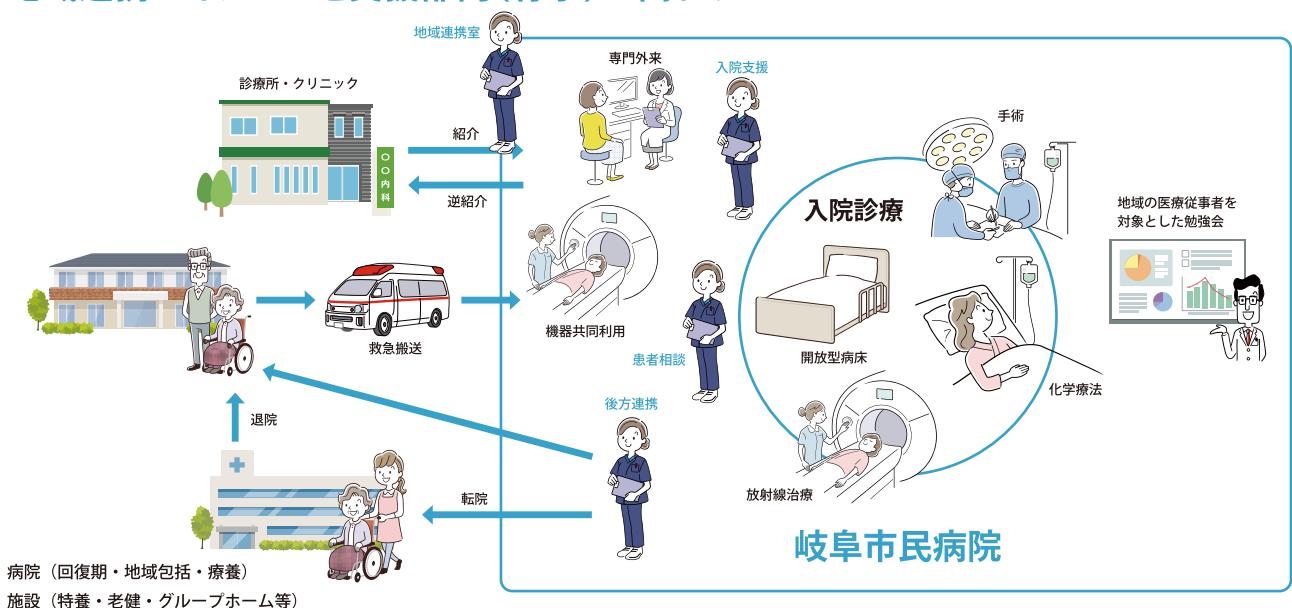
紹介受診重点医療機関とは、かかりつけ医などからの紹介状を持って受診いただくことに重点をおいた医療機関とされており、手術・処置や化学療法等を必要とする外来、放射線治療等の高額な医療機器・設備を必要とする外来などを行います。

これまで、地域医療支援病院として地域のかかりつけ医機能を有する医療機関からの紹介を積極的に受け入れてまいりましたが、今後はさらにそれを推進するとともに、紹介目的の治療が落ち着いた患者さんについては、回復期等を担当する病院への転院やかかりつけ医機能を有する医療機関等へ逆紹介させていただきます。

受診先が変わることには不安があることと思いますが、地域連携部では、地域の医療機関と連携して患者さんが安心して療養できるよう努めてまいります。良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保という、この制度の趣旨をご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

※令和3年5月に成立・公布された「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等の一部を改正する法律」(令和3年法律第49号)において、外来機能報告制度が創設され、地域の医療機関の外来機能の明確化・連携に向けて、地域医療構想等調整会議において協議の結果。

地域連携のイメージと支援部門(青字)の関わり



スタッフインタビュー

当院広報委員長をつとめる、 香村医師にインタビューしました。

先生のお名前、診療科、入職年を教えてください

香村彰宏です。脳神経内科で部長として診療しています。岐阜市民病院に来たのは2015年なので、今年が8年目になります。

先生の経歴を教えてください

2003年に岐阜大学を卒業し、岐阜県立岐阜病院（現岐阜県総合医療センター）で研修した後、2005年から岐阜大学病院神経内科で後期研修を開始しました。途中岐阜薬科大学で研究などもしつつ、2014年まで多くのことを岐阜大学で勉強しました。2015年に岐阜市民病院に赴任し、以後ずっと市民病院で診療にあたっています。

岐阜市民病院の印象はいかがですか

初めて岐阜市民病院に来たときはまだ改装工事の途中で、古い病院が半分残っている状態でした。なので、中の構造が複雑で、案内されていてもどこがどうなっているのかよくわからなかったという覚えがあります。また、駐車場も現在の形ではなく、いつも渋滞していて大変だなと思っていました。

いまはローソンもでき、そのころと比べるときれいになったと思います。駐車場は広がったものの、相変わらずの渋滞で、申し訳なく思っていますが…

先生の専門分野について教えてください

脳神経内科では病名で言うと認知症やパーキンソン病の患者さんが多いかと思います。症状でいうならもの忘れ、ふるえ、しびれ、筋力低下、頭痛等になるでしょうか。脳神経内科は一見脳神経外科の反対の科のようですが、実際には整形外科、耳鼻科、眼科等の病気を見ることがあり、神経の病気の診断の入り口のような役割も持っています。幅広い病気を見ることができる、やりがいのある科です。

医師の見えない仕事はありますか

脳神経内科の場合、それほど隠れた仕事があるわけではないのですが、個人的なモットーとして、診察中にはカルテを入力しないというのがあります。どうしても電子カルテの時代になり、患者さんのほうではなく、パソコンのほうをむいて診察してしまいがちなのですが、できる限り患者さんがいるときには向き合って話を聞くようにしています。その分、カルテの入力は後回しになるので、夜遅くまでやらなければいけないこともあります。

趣味や休日はどのように過ごしていますか

趣味らしい趣味はないのですが、休日は家族とでかけることが多いかもしれません。最近では知多半島にミカン狩りにいってきました。呼び出しもあるので遠くまではいけない日も多いのですが、その中でもなるべくリフレッシュするようにしています。

最後に市民の皆さまにメッセージをお願いします

脳神経内科はあまりなじみのない科かもしれませんが、片頭痛など新しい治療法が出ている病気もいっぱいありますので、お悩みの方はかかりつけ医の先生にご相談いただき、紹介受診していただければと思います。また、岐阜市民病院全体でも、通いやすいところで最先端の治療を受けられる施設ですので、地域のお役に立てればと考えております。



脳神経内科 部長

こうむら あきひろ
香村 彰宏



病院情報システムを更新いたしました

平成29年1月より使用していた当院の病院情報システムを令和6年1月に更新いたしました。

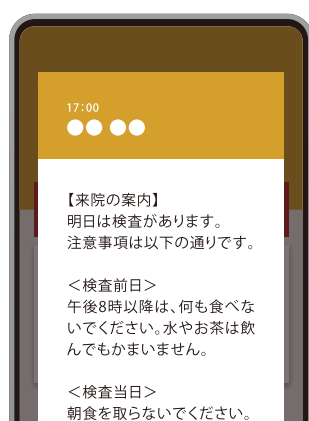
病院情報システムとは、電子カルテを中心として、血液検査等に連結している臨床検査システム、手術管理システム、医事会計システム、放射線管理システム、生理検査システム等々50以上のシステムが複雑に連携したシステムです。

システムを更新するにあたり、患者の皆様が利用しやすいように外来患者案内表示盤を変更し環境を整備しました。

今後はコンシェルジュアプリも導入予定です。コンシェルジュアプリは患者様ご自身のスマートフォンにコンシェルジュアプリを登録してもらうとご自身の診察や検査の予約状況を確認することができるようになります。また診察日の前に翌日診察の予約が入っていることを教えてくれる「アラートリマインド」機能や当日の診察の待ち状況をアプリで確認、順番が近づくと自動で通知してくれる「診察状況のお知らせ」やクレジットカードを登録しておくとお支払いができるといったような仕組みも備わる予定です。コンシェルジュアプリの運用が開始される際には院内及び当院ホームページでお知らせします。

コンシェルジュアプリの運用が開始される際には院内及び当院ホームページでお知らせします。

アラートリマインド



診察状況のお知らせ



これからも新しくなった病院情報システムを利用して、安全な医療サービスの提供と利用しやすい環境の病院を目指していきます。

本号から広報誌「やすらぎ」と病診連携新聞「サルビア」が統合し、地域連携新聞「サルビア」となりました。